みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

二つのマチュ・ピチュ (巻頭エッセイ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008353

巻頭エッセイ

二つのマチュ・ピチュ

関　雄二（国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問）

今年の3月初めに、インカ帝国の都であったクスコ市とマチュ・ピチュ遺跡を訪問した。おもな目的は、インカ関連の新旧二つの博物館を訪問することにあった。新しい博物館とは、クスコ市の中心に位置するマチュピチュ博物館のことである（マチュとピチュを一語で綴っている）。博物館のある建物は、一般にカサ・コンチャ（貝殻の家）と呼ばれ、第10代インカ王トゥパック・インカ・ユパンキの王宮であり、征服後にスペイン人植民者や貴族が改装した邸宅跡である。2011年に開館したこの博物館が収蔵し、展示する遺物は、イェール大学から返還された世界複合遺産マチュ・ピチュの出土品である。

マチュ・ピチュ遺跡を発見したのはイェール大学の歴史学者ハイラム・ビンガムであり、1911年のことであった。ビンガムは、翌12年に大々的に清掃と発掘を行い、ペルー政府の許可を得て、遺物を母国に持ち帰っていた。その後、ビンガムは学者の道を捨て政治家に転職したが、そのコレクションは長らくイェール大学に眠っていた。それを同大学に勤める考古学者リチャード・バーガーと彼の妻であるルーシー・サラサールが、改めて分析を行い、新データを公表するばかりでなく、それをもって全米中を回る巡回展示を2003年に企画した。騒動はまもなく起こる。巡回展の開催を知ったペルー政府は、ビンガムのコレクションが分析のための一時輸出許可によるものであったことを突き止め、イェール大に返還要求を起こすのである。

そのコレクションが2011年から12年にかけてペルーに返還されたのである。ペルー側がイェール大学を米国内で訴え、大学のあるコネチカット州の裁判所で口頭弁論が開始されて間もない2010年の秋に、旧知のバーガー夫妻を訪問した。件のコレクションを私に見せながら、いかに理不尽な要求であるのかを熱心に説く夫妻の姿が今でも記憶に鮮明に残っている。だからこそ、その年の冬に、イェール大が返還を決めたとのニュースが流れると、私は耳を疑った。

イェール大学の出した返還条件には、きちんとした収蔵と展示施設をペルー側が用意する点が含まれ、イェール大学、ペルー文化省、それにクスコでの実質的な受け入れを行う国立クスコ・サン・アントニオ・デ・アバド大学（以下クスコ大学）の間で協定を結ぶ形で決着を見た。クスコ大学が提供したのが、先にあげたカサ・コンチャの建物であった。文化財管理に関して、これまでペルーはお世辞にも立派であったとはいえない。マチュ・ピチュのコレクションとて、イェール大が保管していなかったら、どこかに消えてしまったかもしれない。その意味でイェールが出した条件にはうなずける。

カサ・コンチャは石造りの立派な建物であり、その一部にはインカ時代の石組みも残っている。展示室には、ビンガムの人形を組み込んだ発掘現場のジオラマ展示があり、照明や展示方法はきわめてモダンである。協定書によれば、展示はすべてイェール側が行い、文化省やクスコ大学側は一切手を触れることができないことになっている。したがって、展示のストーリーは、ほぼ米国での巡回展の内容に沿うものであった。

じつは、マチュ・ピチュを専門的に扱う博物館はすでに存在する。これがもう一つの訪問先であるマチュ・ピチュ遺跡博物館である。マチュ・ピチュ遺跡に向かうバスが、つづら折れの登りに入る手前、ウルバンバ川の橋を渡った右手にある。バスの起点であるマチュ・ピチュ村（旧アグアス・カリエンテス村）から徒歩で20分ほど離れた場所にあり、そのアクセスの悪さからか、来館者はあまりいない。こちらは国立博物館である。そのためか、新旧博物館で展示の内容にずいぶんと違いがある。ペルー政府は、ビンガム・コレクションの返還問題が浮上してくる頃より、ナショナリズムを高揚させる文化政策をとってきた。民間の研究者もこれに拍車をかけるようなキャンペーンを繰り返し張った。

とくにマチュ・ピチュを発見したのはビンガムではなく、それ以前から知られていたという主張は、マスコミでも盛んに報じられた。ビンガムが到来するよりも前に、遺跡周辺の土地は入植者間で売買され、1874年にはドイツ人のヘルマン・ベーリングがスケッチを残しているし、ビンガム同様にインカの幻の都を求めて分け入ったフランス人探検家のシャルル・ウィネルが、この遺跡の位置を確認しているという証拠が出てきたのである。この経緯を記した説明パネルが、遺跡博物館の最初の部屋に据えられている。ビンガムを発見者として認めようとしない態度がここに見て取れる。

ペルー政府は、最終的に二つの博物館の統合をもくろんでいるようだが、返還に際して交わした協定書にある、イェール大の許可無くしての現状変更は認めないという条項が邪魔をして、当分は実現しそうにはない。

貴重な文化財を守り抜き、コレクションの学術性を高めたイェール大に敬意が払われてしかるべきだが、一方で「自分が働いている博物館をけなすのは好きではないが、ペルーにあり、ペルーの宝が展示してある博物館なのに、どうしてペルー人は触れてはいけないのか。まるで私たちが無能扱いされているようで腹立たしい。ここはイェールの植民地なのか。」と、カサ・コンチャの博物館の受付で働く若者が私に吐露した心情もうなずける。どこかに帰属しなくてはならない文化財自体に問題があるのかもしれない。共有財、いわゆるコモンズの考えはどこまで文化財で可能なのだろうか。